

ふるさとの民話 (第六十話)

『かけ地蔵』

八幡の国道のわきに、ぼん字を彫り刻んだ板碑(いたび)を背中にして、一基の地蔵が祀られています。

昔、七尾に住む「早川千之助」という武士が、かけにかかった時、夢の中に仏様が現れて、この地蔵をお参りすることを告げた。そして、この地蔵をお参りすると、かけが治ったと伝えられています。



また、このお堂は、小川を隔てて建っているのです。地蔵にお参りする時、そこにかかっている石橋を踏んで渡っていました。ある時、この石橋が、仏様であることを知った村人たちは、「恐れ多いことだ。」と思い、この石橋を起こして、千野村の旧家、山口家の前の道路にまつたところ、その仏様が夢枕に現れて、

「わたしは、人に踏まれることによって、その人の病気を知りそれを治すのだから、どうか、もとどおりにしておいてくれ。」

と言って、姿を消しました。

この話を聞いた村人たちは、おそれかきこみ、仏様をもとどおりの石橋にしたということです。

(八幡町伝承 採話 守沢 政治)

→